

# 富士山ハザードマップの改正について

富士山は過去に活発な噴火活動を繰り返して成長してきた活火山である。富士山は1707年に噴火した後、約300年間沈黙してきた。しかし、平成12年～平成13年にかけて富士山直下で低周波地震が多発したことを契機に平成16年に富士山ハザードマップが作成された。その後、富士山に関する新たな各種調査結果により、新しい知見が得られた。そこで富士山火山防災対策協議会において平成30年度から3年間の予定で改定作業を行い、令和2年度3月にハザードマップの改定が示された

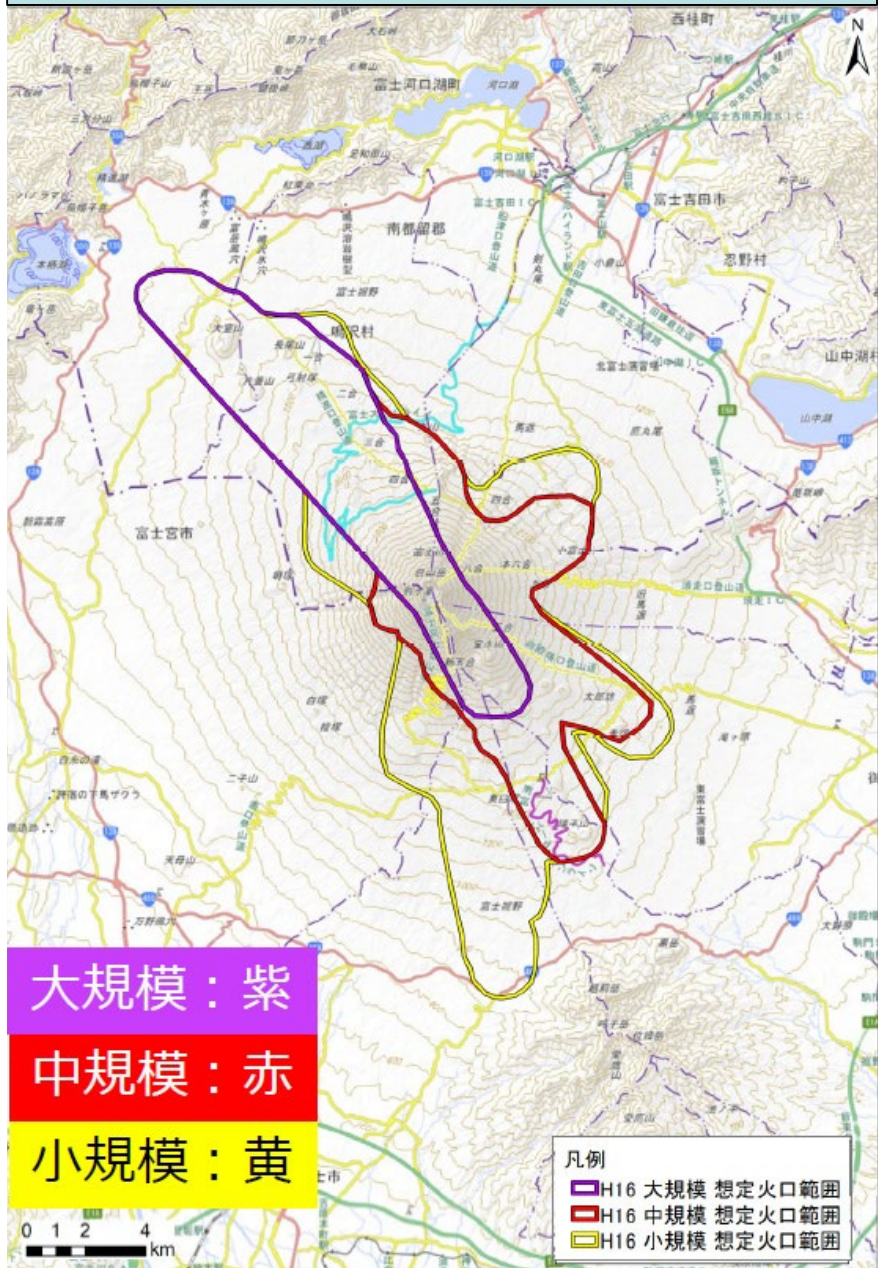
## 今回のハザードマップ改訂の概要

| 項目               | 改定の概要                                                                                                                                                                                   | 検討状況   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| ①想定火口範囲          | 最新の調査結果に基づき変更(拡大)                                                                                                                                                                       | 平成30年度 |
| ②対象とする噴火年代       | 「3,200年前～現在まで」としている過去の噴火について、新たな年代整理(産業技術総合研究所による富士山火山地質図(第2版))に基づき変更<br>→「 <u>5,600年前～現在まで</u> 」に拡大(活火山の定義である「 <u>1万年以内</u> 」を踏まえ、特に噴火活動が活発な年代に相当)                                     |        |
| ③地形メッシュサイズ       | より詳細な地形データを反映するため、現行の200mメッシュ(溶岩流)、50mメッシュ(火砕流・融雪型火山泥流)を変更<br>→ <u>20mメッシュ(航空レーザ測量による数値標高モデル)</u> を採用                                                                                   |        |
| ④溶岩流             | 最新の調査研究において、最大規模となる貞観噴火の噴出量が見直されたことから、溶岩流シミュレーションに用いる条件を見直し<br>→ <u>大規模噴火の溶岩の噴出量を7億m3から13億m3に変更(毎秒あたりの溶岩の噴出量は大・中・小の噴火シミュレーションごとに再設定)</u>                                                | 令和元年度  |
| ⑤火砕流<br>・融雪型火山泥流 | 最新の調査研究において、最大規模となる鷹丸尾火砕流の噴出量が明らかになったことから、火砕流シミュレーションに用いる条件を見直し<br>→ <u>火砕流噴出規模を240万m3から1,000万m3に変更</u><br>火砕流シミュレーションによる想定到達範囲と積雪量観測に基づき、融雪型火山泥流のシミュレーション条件を検討 → <u>平成16年版と同じ条件を採用</u> | 令和2年度  |
| ⑥山体崩壊            | 表現方法及び記載方法について再検討 →有効なハザードマップを作成することは困難であるため、過去の実績を示す                                                                                                                                   |        |
| とりまとめ            | ハザードマップ公表に向けた、シミュレーション結果のとりまとめ、表現手法の検討、報告書の作成など                                                                                                                                         |        |

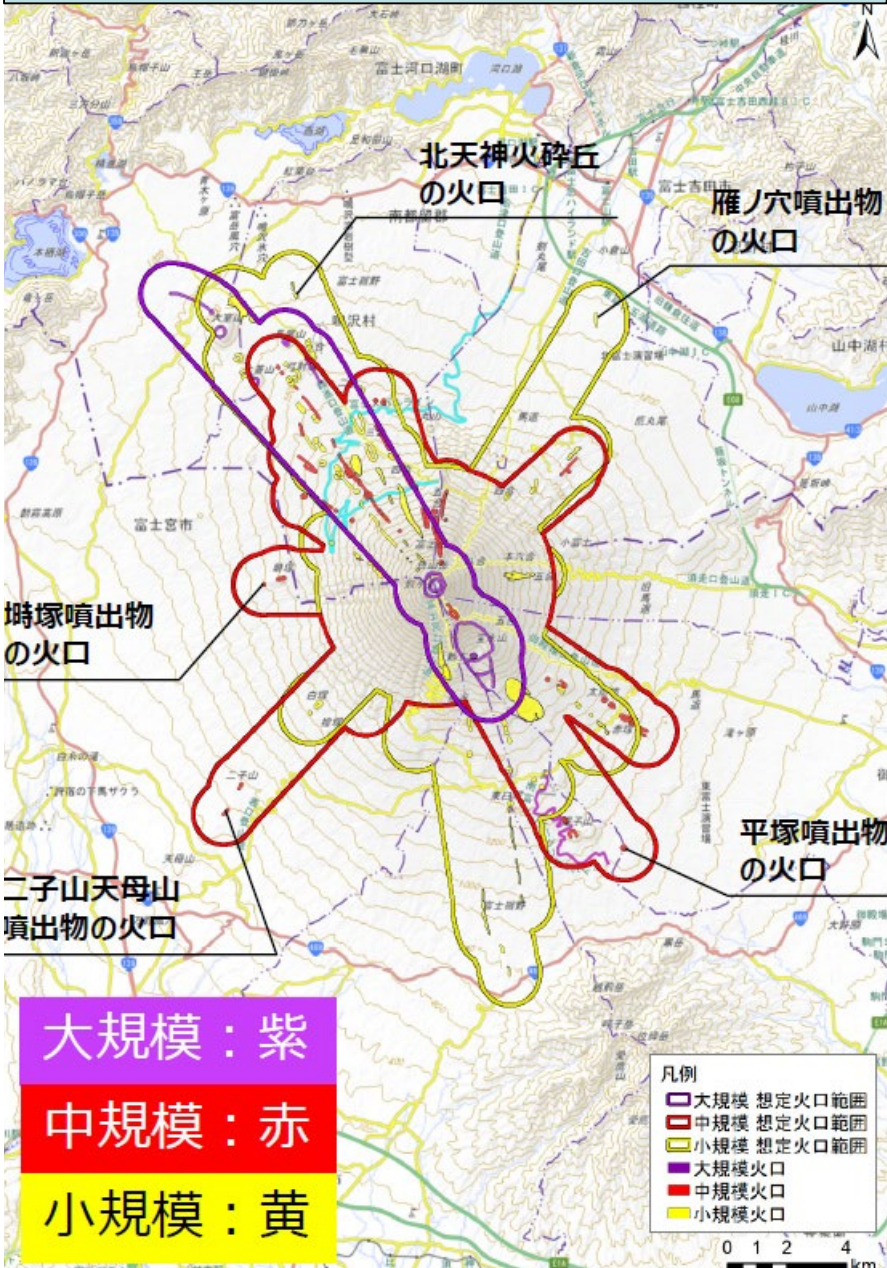
### 想定火口範囲の見直し

- 火口の追加等により**想定火口範囲が拡大**  
■対象噴火年代の変更や近年の発見等による、中・小規模噴火の火口を新たに追加  
■伏在火口として、山頂から半径4km以内の全域を想定火口範囲に追加

平成16年版の想定火口範囲



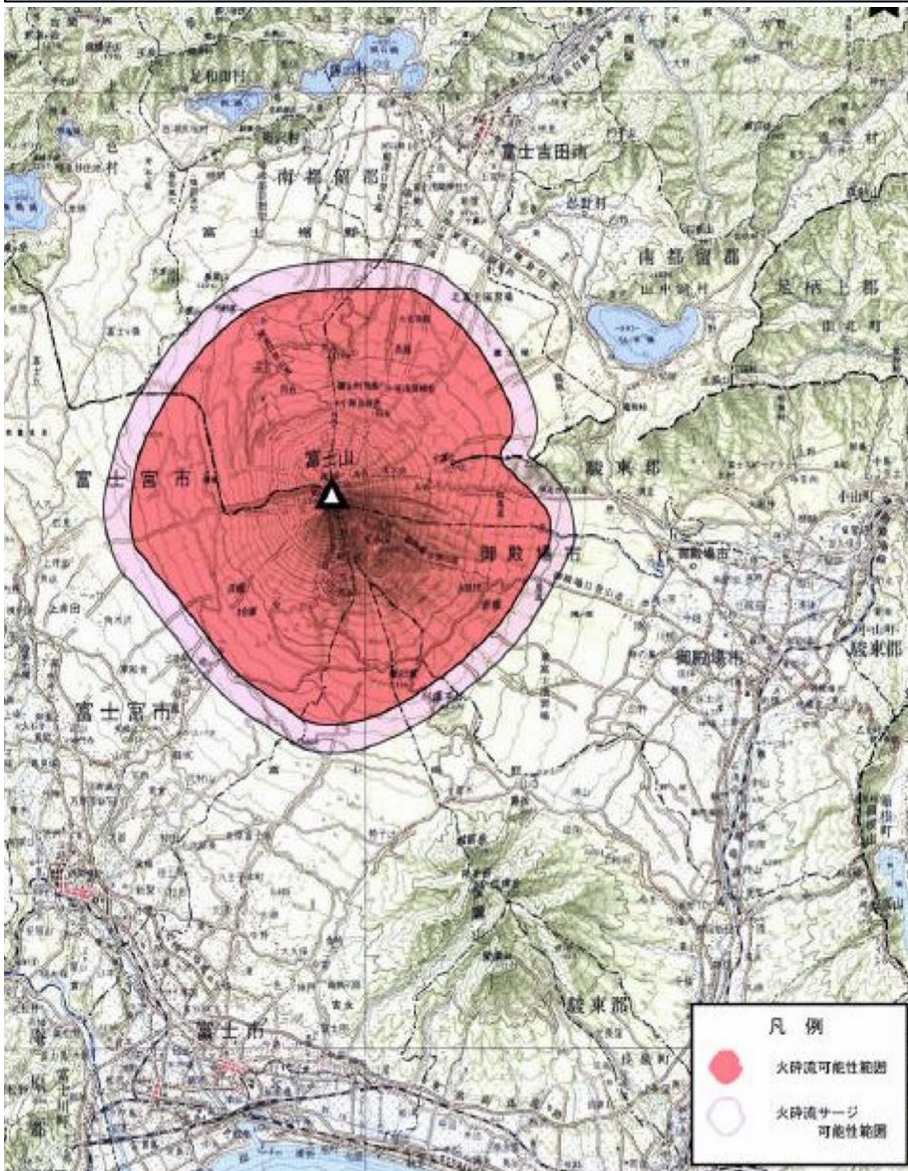
改訂後の想定火口範囲図



### 火砕流

- 火砕流の噴出量を平成16年度版の240万m3から1000万m3に変更したことや、地形データの精緻化により、**傾斜の急な北東方向(富士吉田市方面)と南西方向(富士宮方面)に長く流れ、火砕流の到達距離が長くなる傾向となった。**

平成16年版の可能性マップ



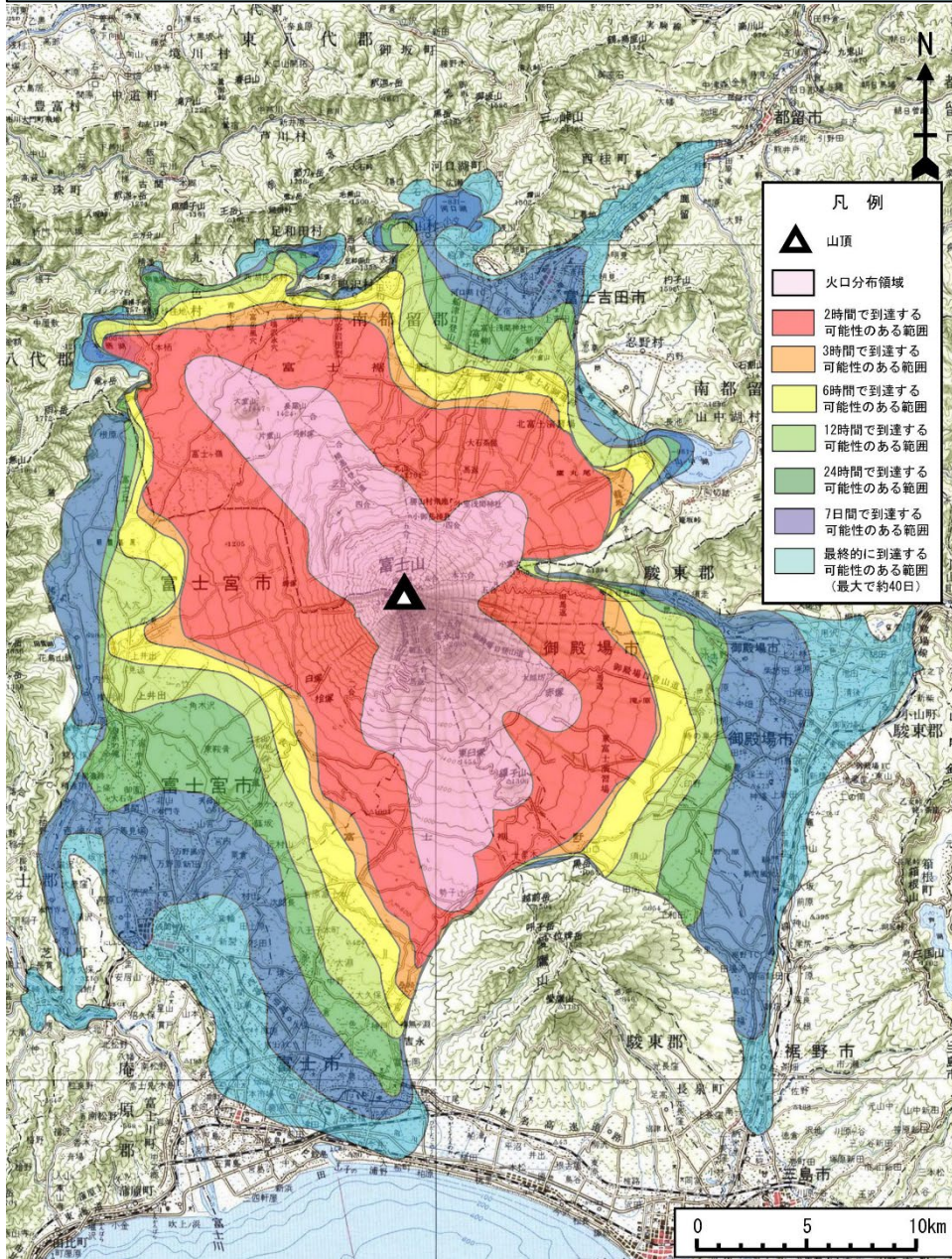
改訂後の可能性マップ



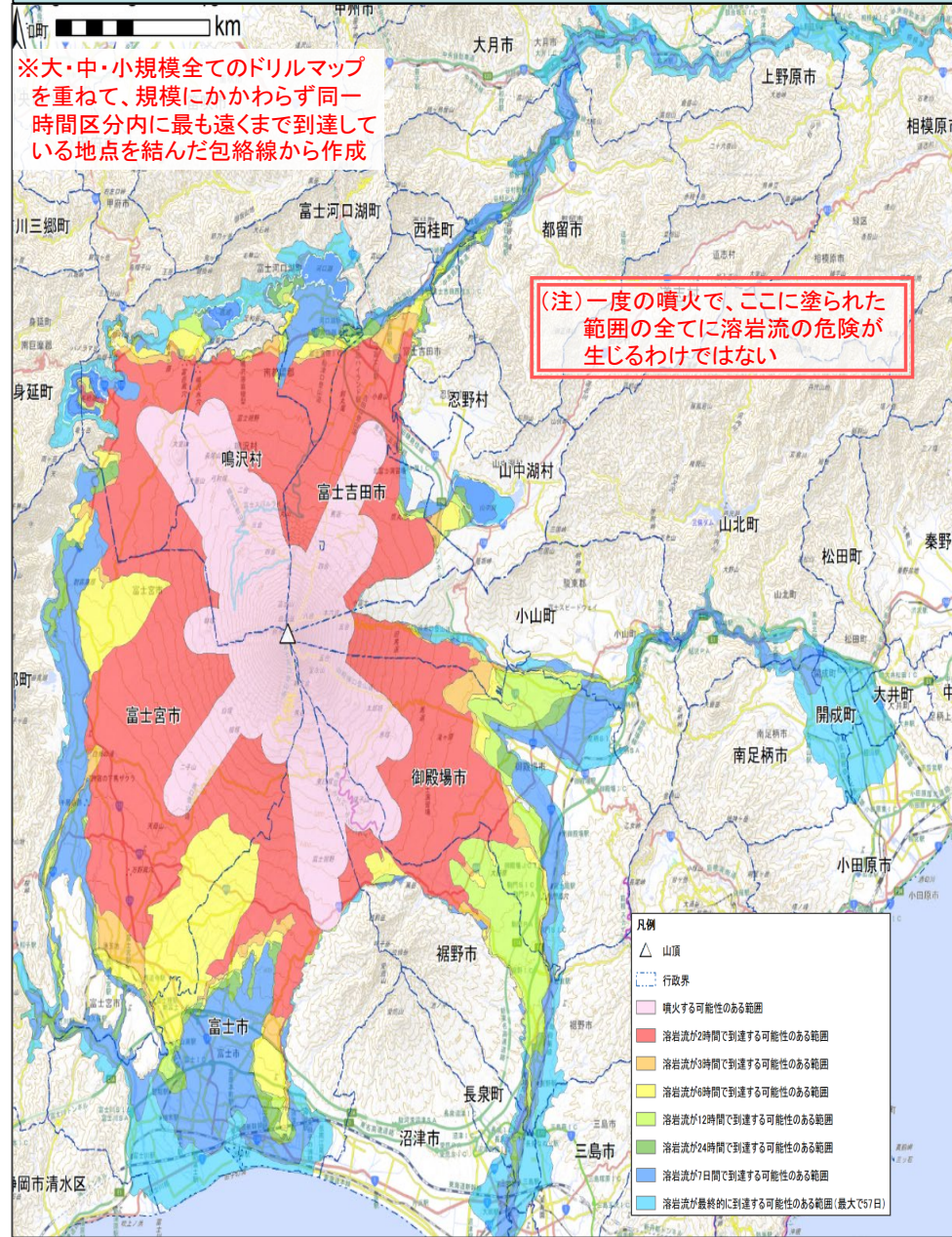
### 溶岩流

- 大規模溶岩流の噴出量を平成16年版の約2倍である13億m3に変更したことやシミュレーションの精緻化により、大きな河川や平野部を流下し、**溶岩流の流下範囲が拡大した。**  
■想定火口範囲の拡大などに伴い、**市街地などへの溶岩流の到達時間が早くなった**

平成16年版の可能性マップ(溶岩流)



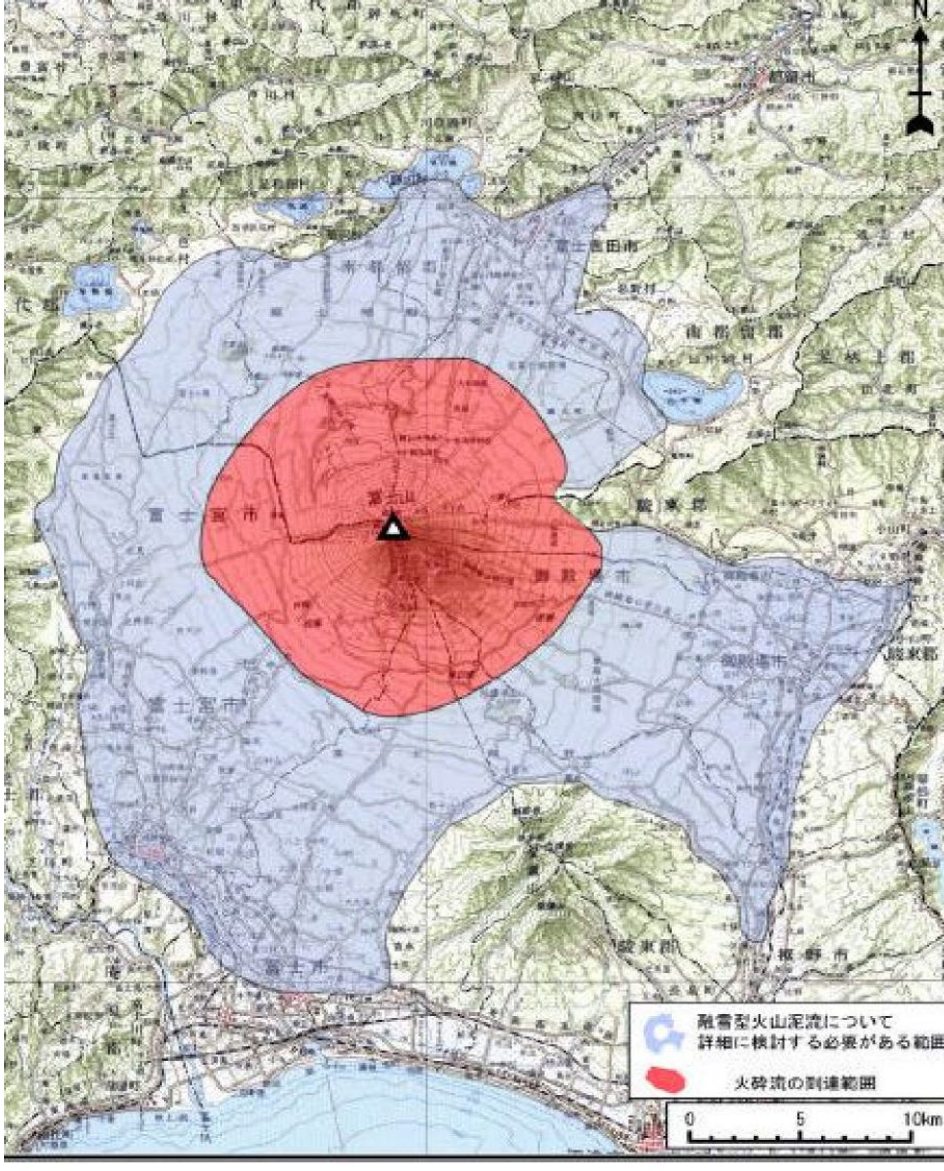
改訂後の可能性マップ(溶岩流)



### 融雪型火山泥流

- 平成16年度版に比べて、地形の精緻化及び計算開始点の数を増やしたことにより、可能性マップの影響範囲がより地形の影響を反映した詳細なものとなった。  
■精緻な地形が反映されたほか、想定する火砕流の噴出量が増加したことにより、**融雪型火山泥流が大きな河川等を流下し、遠方まで届く結果となった。**

平成16年版の可能性マップ



改訂後の可能性マップ

